



施設園芸技術指導士としての抱負

河合 幹裕 (株)大仙 温室事業本部 営業企画室

私は温室メーカーである(株)大仙で、温室事業本部の営業企画室として、全国の営業支援を担当しております。食品メーカーや農研機構(旧 食品総合研究所)に勤務した後、家業である花農家に就農、その後、縁あって現職に就くことになりました。食品分野から農業分野まで幅広く経験できたことが今の仕事に非常に役立っており、お客様の要望に合わせて常により良い提案を心がけております。

大仙は1892(明治25)年に愛知県豊橋市北島町で鈴木仙吉が創業、以来130年以上に渡つて、光という無限の恵みを豊かな実りや暮らしの快適性に活かすことを求めてきました。なお、大仙という社名は創業者である仙吉の職業が大工であったことから「大工の仙吉」大仙となりました。その当時の温室は全て木造であり、豊橋は良質なズギ、ヒノキの全国有数の産地、愛知県東北部にある三河山間地域から豊川を下つて木材が集積される場所であったことから、主要部材の木材が豊富に揃い、新しい農業として、いち早く温室栽培、つまり施設園芸の盛んな地域となりました。今までこそ温室の主要部材は木材から鉄・アルミに代わりましたが、これらの部材の製造工程から得られる高度な加工技術や温室から得られた光を取り入れる採光技術を活かし、温室事業以外にも一般建築である特販事業、建材事業、額縁事業の4事業を柱として、地域と共に成長してきました。

私たち大仙の企業ドメインである温室事業は、より効率的に生産性を高め、諸外国との競争にも負けない高付加価値な農産物の生産など、常に新しい時代の農業への対応が求められてきました。さらに地球環境の未来を見据えたサステナブルへの取り組みという視点も忘れてはいけない課題です。

近年、施設園芸を巡る情勢は大きな変化を迎えています。ウクライナや中東に起因する社会的情勢によるエネルギーと資材の高騰、温暖化を通り越して沸騰化する気候変動、さらに10年後には農業人口が現在の1/4にまで減少してしまう可能性のある労働力不足等、農業を取り巻く情勢は非常に厳しくなる一方です。何かと資材を利用する施設園芸においては、温室の原材料費は5年前と比較して1.5倍以上になっており、どのように工夫して取り組んでいくのか、大きな課題が山積しております。このような状況下において、生産者の投資意欲は減退を辿っていますが、私たちを必要とするお客様のためにも、施設園芸の入口を担う役割として、また、元請けとして計画、設計、施工全般を継続しつつ、温室を建てるだけでなく、施設や設備機器を少しでも長く使い続けていただくために、アフターメンテナンスにも力を入れていきます。

施設園芸技術指導士という資格を持って仕事をすることは、お客様からみれば、施設園芸分野全般にわたる高度な専門知識を身に付けた者と関わるわけであり、その信頼に応えられるよう重大な責任感と緊張感を伴います。また、お客様の要望を満たす設計や提案を常に心がけ、さらにお客様の収益向上につながるように努力しなければなりません。そのためには、自社だけでなく、生産者や生産法人を始め、仕入先や協力会社、さらには教育機関や試験場等、施設園芸に携わる全体と連携することが大切だと考えております。

これからも施設園芸技術指導士として、大仙という温室メーカーとして、今後の施設園芸の発展のために、施設園芸の魅力や将来への可能性を伝えられるよう邁進していく所存です。